

関東地方におけるヤマシギの越冬生態および年齢・性の識別
○小田谷嘉弥（我孫子市鳥の博物館）・牛根奈々（日本獣医生命科学大学）

ヤマシギ *Scolopax rusticola* は旧北区に広く分布する中型のチドリ目シギ科の鳥類で、他の多くのシギ科鳥類と異なり森林や乾いた草地にも生息する。本種は夜行性で通常の鳥類調査では記録されにくいいため、基礎的な越冬生態について不明な点が多い。個体群のモニタリングや生態研究を行うためには、日本国内における本種の基礎的な生態を記載し、年齢識別方法を確立することが必要である。

2014年11月の新潟大会では本種の年齢識別について報告したが、再捕獲の例数が2例と少なく、年齢ごとの変異についての情報が不足していた。また、性の識別については情報が得られていなかった。そこで、その後の調査で得られた再捕獲個体について情報を収集し、血液・羽毛サンプルからの性判定を行い、性と年齢の識別についてより詳細に考察を行った。

標識調査は、2012年から2018年の10月から4月にかけての渡り時期および越冬期に、茨城県および千葉県の7か所の農地・河川敷において実施した。捕獲は、たも網とライトを用いた方法、およびかすみ網を用いて行った。計230羽を新規に捕獲し、各部測定と換羽状況の記録、および写真撮影を行った。そのうち112羽から血液・羽毛サンプルを採取し、DNAから性判定を行った。同一地点での越冬期間内の再捕獲（Rp）がのべ26例、異なる越冬期間での再捕獲（Rt）および観察回収がのべ30例得られた。本研究の調査地間での再捕獲は無かったが、茨城県常総市で放鳥した2個体が、繁殖期にロシア共和国サハリン州で回収された（銃猟および死体拾得）。そのうち1個体は第一回冬羽として標識放鳥し、4月まで越冬地に留まっていた個体で、同年の7月に回収されたものだった。

再捕獲による羽衣の比較から、初列大雨覆、下次列大雨覆、外側初列風切先端の摩耗程度等は国内に渡来するヤマシギの年齢識別の形質として有効であることが確認された。停止換羽（arrested moult）によって残っている次列風切および下雨覆の形状に注目することで、一部の第二回冬羽の個体は第三回冬羽以降の羽衣と識別可能であることが示唆された。また、再捕獲によって確認された第二回冬羽では、初列雨覆等の特徴が幼羽に似る個体がいることがわかった。

解析した112個体のうち、71個体が雄、41個体が雌と識別された。雄の方が尾羽が長く嘴が短い傾向があり、ヨーロッパの個体群から得られている知見と同様に、露出嘴峰長に対する尾長の比によって一部の個体が識別できることが示唆された。

再捕獲の捕獲時期から、越冬個体は10月下旬～11月上旬に渡来するものがあること、遅い個体では4月中旬まで留まることがあることが明らかになった。月ごとの幼鳥の割合は年によって変動があったが、越冬期の前期では低く、越冬期の後期により高くなる傾向があった。調査地のうち継続的に調査を行った2か所で放鳥した個体の、翌年の帰還率は年によって異なったが成鳥では6.9～14.8%、幼鳥では0～36.3%だった。

本研究で得られたヤマシギの基礎的な越冬生態の情報、年齢および性の識別の知見は、本種の保全管理、標識調査や狩猟による捕獲個体および博物館資料などの同定に応用できるだろう。